

愛知県長久手町万博公園の池と湿地

高崎保郎

1. はじめに

2005年愛知万博の主会場とされ、現在は愛・地球博記念公園と称される愛知県長久手町東南部の丘陵地帯に所在する県有の公園（行政区分は愛知県長久手町熊張茨ヶ廻間及び同岩作三ヶ峰）の自然環境、主として池と湿地について現況（2008年）の概略を紹介する。

2. 万博の影響

当初主会場予定地とされた瀬戸市海上の森から、典型的な里山を造成破壊するとしてその非を国内外から糾弾されたことにより、近くの長久手町に所在し、すでに公園化されている愛知青少年公園に変更された経緯は広く知られているところである。この公園と周囲は万博終了後に修復され、現在は再び一般に供用されている。以前は体育及び児童遊園施設のみであったが、県環境部は児童や俄かなチュラリストを対象とした初歩的教育施設を新設した。



図1 長久手町の位置

さて、青少年公園は比較的丘陵の自然環境を残して1970年に完工した。その後30余年間の植生等回復期間も経た。今回の万博工事でリニアモーターカー基地を含む園内北東部にあった二次林はかなり失われ、現在未整備の裸地のままか花壇等に姿を変えたが、中部・南部の主たる二次林地帯や水系については気遣っていたよりもダメージは少なかった。特に、元々利用されていなかった南端三角形の二次林（高崎呼称「手付かずの森」と「ハネビロエゾトンボの沢」）はそのままである。すでに運動施設となっていた土地を選んで設けられた多数の展示館等はほぼ完全に撤去されている。一部は旧施設に戻されつつある。青少年公園時代に残されていた丘陵の自然状態部分はまずまず温存されたと言えよう。

3. 池と湿地の現在

1) 池

園内で水生生物棲息圏と認められる池は10ヶ所あり、多くは湿地を伴っている。公園西端低地にある二、三の池は貯水池化され対象外である。池上下の流水はほぼ水路化されており、後述する「ハネビロエゾトンボの沢」以外は流水性種に適さない。10ヶ所の池の概要を表1にまとめた。

表1 池の概要

池名	湿地の、 付帯	満水面 積(ha)	岸の構造、周囲、水質など	植生
ささ池	有	0.4	擬木・コンクリート 1面開放・3面林縁 水色黄緑、鯉	ヒシ、イヌタヌキモ優占 一部にヨシ群落
はず池	無	0.4	コンクリート 全面開放 水色黄緑	ヒシ若干、ハス、ガマ、キシウブ、Iris sp.
つつじ池	有	0.3	堤部コンクリート・土・擬木 全周裸地、水色緑	一部にガマ等あるが 浮葉、抽水植物なく貧弱
こいの池	無	2.4	コンクリート・擬木 1面林縁・3面開放 放流部にアオコ、腐臭 鯉	ジュンサイ、ヒシ、イヌタヌキモ、スイレン、 一部にヨシ群落、カンガレイ
第2キャン プ場池	有	-	土・一部コンクリート 概ね林縁	全面スイレン、 一部にキシウブなど
めだか池	無	0.5	石組・岩 概ね林縁、やや濁り	ジュンサイ優占 一部にカンガレイ、ガマ、ヨシ等段階的群落
かえで池	有	2.1	コンクリート・石組・擬木 1面裸地・3面林縁 水は清澄、鯉多数	ジュンサイ、イヌタヌキモ優占、タチモ 部分的にカンガレイ、ホタルイ、クログワイ
メイの家 前池	有	-	全周擬木、岸は芝生で単 調 概ね林縁	全面ジュンサイ 抽水植物なし
かめの 池	有	0.3	土・木杭と石組 半分林縁・半分開放 水色緑でやや濁り	浮葉・抽水植物ほとんど無し 岸の一部は湿生草本繁茂
かきつば た池	有	1.5	堤部等一部コンクリート・ 土・土の緩傾斜部あり 1面林縁・3面開放 水は清澄、鯉	一部にヨシ群落の他は浮葉・抽水植物ほとんど 無し

地のままで今後周辺環境がどうなるか判らない。一般のため池の自然度と比較した場合、最良とは言えないものの、園内の池は押しなべて決して悪いものではない。悪徳釣具関係者や不埒な釣り人の侵入がなく、コイはいるものの外来の魚類や爬虫類による汚染がないことは、県立公園として厳重に管理されてきた場所の良い面である。1 個の池でなく園内ため池群として扱えるならば、「愛知のため池 100 選」に推薦したい。

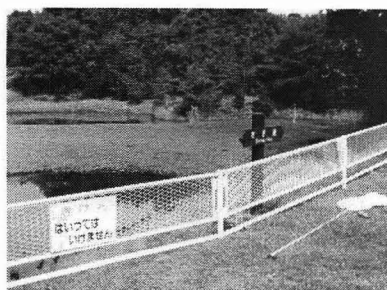


写真1 ささ池 対岸左水面と林の間が裸地湿地 1999.9.28

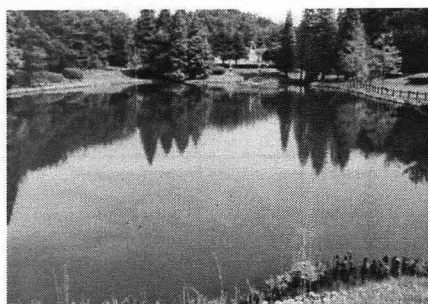


写真2 つつじ池 右端柵内芝生 1999.9.28



写真3 つつじ池 万博後芝生は湿地状に変わる 2007.11.15

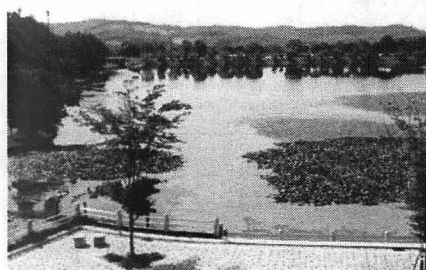


写真4 こいの池 スイレン・ヒシ・ジュンサイ 1999.9.28

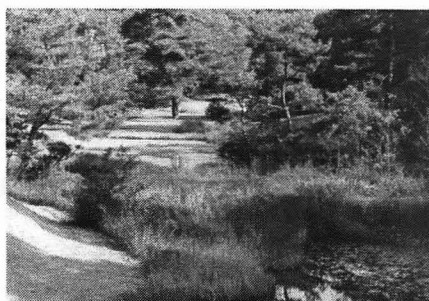


写真5 第2キャンプ場池 湿地が湿生草本で覆われる 2007.11.15



写真6 かえで池 ジュンサイ、対岸に湿地がある 1999.9.9

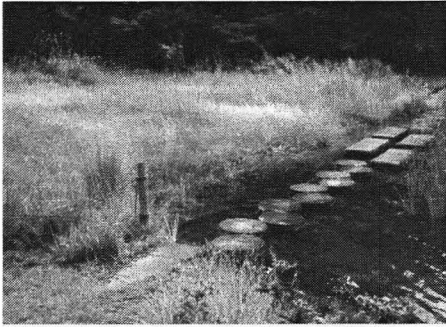


写真7 かえで池の湿地、
中央はシラタマホシクサ 2008.9.3



写真8 かめの池
手前は湿地 2007.7.6

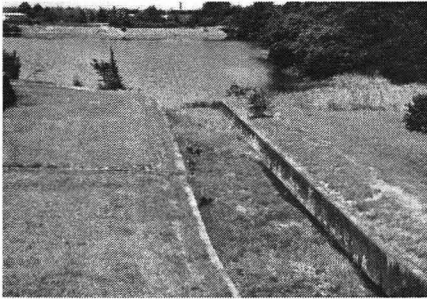


写真9 カキツバタ池 手前右端が湿地
1999.9.9



写真10 かきつばた池の草原湿地
1999.9.9



写真11 かきつばた池の湿地で産卵する
ヒメアカネ 2008.10.29



写真12 ハネビロエゾトンボ
ハネビロ沢 2008.9.14

2) 湿地

池畔に存在する湿地の成因は主として岸の浅い部分が池の水に浸されて出来たもの、集水域から地表あるいは地中を経て流入する水によりその流入部に形成されたもの、その両方の作用によるものなどであろう。

公園は周伊勢湾の尾張東部丘陵すなわちこの地方に特徴的に多い湧水湿地が生じる地帯に立地している。ささ池北岸上部の林縁に小規模ながら所在する貧栄養湧水で涵養される園内唯一の裸地状向陽湿地は斜面崩落湿地の名残と考えられ、今のところ湧水は安定している。

ささ池以外の池畔湿地も基本的には後背二次林等の周水域からの湧水に困っている。かめの池の湿地ではその典型を見ることができる。第2キャンプ場池（万博前はこの場所にキャンプ場があった）では、池からの水の浸入もあるためか富栄養化が進み、ミゾハギ、キショウブ、カヤツリグサ科、イネ科各種の群落が増大高茎化し、開水面がほとんどなくなっている。かえで池南岸に1ヶ所ある湿地は園内唯一のサギソウ、シラタマホシクサの生育地であるが、ここも高茎湿生植物の繁茂が著しく、圧迫されている。メイの家前池の土手にある小規模湿地は、植生は隣接するかきつばた池と同じで、二つとも周囲の芝生とともに定期的に草刈されるので、草丈の低い開水面が見える状態が保たれている。かきつばた池上部の湿地は広大かつ特異である。湿地の主たる構成者はウシクサで、その他にコブナグサ、コアゼカヤツリ、アカバナ、アキノウナギツカミ、イワヌメリ、ハリコウガイゼキショウ、チゴグサ、ホシクサの一種などが混在している。ここも周囲の芝生と同時に草刈するので、草丈が高くならず開水面も良く見えて、秋季ヒメアカネの一大産卵場となる。つつじ池の南側の側面の全長にわたって湿地状態となった場所が存在する。この場所は万博前は芝生の緩斜面でベンチが置かれ植樹もされていた。万博ではこの上にメキシコ館が建てられた。周辺にも展示館が集まり、終了後は撤去され裸地となった。保水力の低下も関与したのか、湧水域は雨水が溜まって芝生はなくなり、途中経過で生じたであろうセイタカアワダチソウなど陸生高茎草本と湿性草本が混在する中途半端な湿地状態になった。池との間には段差と柵があるが、池の水位が高い時は面一になる。

まとめると池畔湿地7ヶ所は、完全な貧栄養裸地型1ヶ所、多少の裸地部分もある開放浅水面を有するもの1ヶ所、丈の低い湿性草本が一律の草地状を呈するもの大小各1ヶ所、丈の高い湿生草本に覆われ富栄養に傾きつつあり放置されているもの1ヶ所、年1回の草刈手入れが行われているもの1ヶ所、不安定な湿地状態を保っているもの1ヶ所となる。

3. 池の歴史

公園の池の往古の状況については、郷土史家小林元氏の詳細な考察がある（小林、2002、2008）。これによると、池の築造年代が判るのは次の通りである。

ささ池：1841年（天保12年）の北熊村絵図に無名で図示されている。更に遡ると1671年調査による寛文村々覚書の北熊村の項に「雨池（ため池の意）四ヶ所公儀により修復」として旧名の「白はね池」の名が現れている。今の公園北部一帯は白はねと呼ばれ、北熊村の水源地帯であった。

白はねとは白い粘土を指す。現在ささ池北岸に残存する裸地状湧水湿地は当時から湧水が生じる地層であったことを示す証左であろう。

つつじ池：寛文村々覚書に旧名六洞池の名で、北熊村絵図には無名で図示されている。

めだか池：旧名はこえど池。つつじ池と同様に扱われている。なお、現在小江戸池という名の池は峠を東に越えた豊田市八草に存在し、「越える」を意味するらしい。

こいの池：1954年（昭和29年）砂防のため2段の堰堤を備えて築造された大池で、北熊村絵図に無名で載っていた井平池（猪堀池）は、この時吸収消滅したらしい。

かえで池：こいの池に引き続き新設された戦後の新しい池。

かきつばた池：かえで池より後に、ため池が無かった谷に新設された新しい大池。この上部のかめの池の由来はわからない。

なお、国土地理院5万および2.5万図では、昭和22年応急修正版ではめだか池とおぼしき池が一つあるだけ。昭和46年・48年修正測量版で、かめの池を除く主要6池が揃っている。現在の池名は青少年公園完成時に付けられた。

4. 園内で記録された蜻蛉

蜻蛉は幼虫期を水域に依存する。水域は止水と流水に大別される。園内では前にも述べたように供用地区の流水系は人工水路化されているので流水性種は乏しく、止水性種すなわち池と湿地に由来するものがほとんどである。この中であって万博前には自由に立ち入ることが出来たが一般に供用されていない敷地南端の峠に近くやや傾斜がきつい「手付かずの森」の二次林内に1本ある溪流「ハネビロイトンボの沢」には絶滅危惧Ⅱ類のハネビロエゾトンボが現在も安定的に棲息している。本種以外にも流水性種であるアサヒナカワトンボ、オニヤンマ、ミルンヤンマがここで発生している。なお、この流れの下流には小さな池とハッチョウトンボがいた湿地があったが、2000年の東海豪雨で埋没した。

ささ池の150m²の裸地湧水湿地からは年間1000頭前後のハッチョウトンボが羽化（名古屋女子大学八田耕吉教授グループ、未発表）することは特筆される。この池では一時ベニイトンボが定着した。同池では22種を記録。

かきつばた池畔の緩傾斜地帯でのフタスジサナエの大量羽化、同池の草原湿地でのヒメアカネの多数の産卵活動も特記される。記録種22種。

かめの池もフタスジサナエ、オグマサナエ、オツネイトンボ、湿地のハッチョウトンボの安定的な定着など23種が記録されている。

第2キャンプ場池は湧水湿地部分が湿生植物の繁茂で開水面を失いモートンイトンボが絶滅し、ハッチョウトンボも他の場所で細々と生きている状態であるが、池畔には程よい叢を有し14種が記録されている。

青少年公園時代からの全記録種は44種で、公園に入るという面倒臭さから全般的な長久手町地内の調査結果（全記録種80種、現存約60種）と比較すると幾らか調査密度が低いことは否めな

い。万博関係アセスでは出鱈目な内容もあるので注意を要する。1993年以降の記録種を次に列挙する。

イトトンボ科：モートンイトトンボ、ホソミイトトンボ、キイトトンボ、ベニイトトンボ、アジ
アイトトンボ、アオモンイトトンボ、クロイトトンボ

モノサシトンボ科：モノサシトンボ

アオイトトンボ科：オツネトンボ、ホソミオツネトンボ、アオイトトンボ、オオアオイトトンボ、

カワトンボ科：アサヒナカワトンボ

サナエトンボ科：ヤマサナエ、フタスジサナエ、オグマサナエ、コオニヤンマ、ウチワヤンマ

ヤンマ科：サラサヤンマ、ミルンヤンマ、クロスジギンヤンマ、ギンヤンマ、オオルリボシヤン
マ

オニヤンマ科：オニヤンマ

エゾトンボ科：オオヤマトンボ、トラフトンボ、ハネビロエゾトンボ

トンボ科：ハラビロトンボ、シオカラトンボ、シオヤトンボ、オオシオカラトンボ、ヨツボシト
ンボ、ハッチョウトンボ、ショウジョウトンボ、アキアカネ、ヒメアカネ、マイコアカネ、マユ
タテアカネ、コノシメトンボ、ノシメトンボ、ネキトンボ、コシアキトンボ、チョウトンボ、ウ
スバキトンボ

5. 今後のことなど

環境万博を謳った県としては、万博跡地の自然状態が比較的良好なこと（二次林、水系、ギフ
チョウなど）は、里山に拘る生物多様性条約第10回締約国会議COP10で有力なアピール拠点にな
ると思料される。当公園は基本的にはその由来からも児童・運動施設が主体であろうが、現存す
る自然環境をより安定的、高度なものに維持することも目的のひとつである。例えば、樹木の過
密化が著しいために生じた多産した林床のカンアオイ類の消滅危惧解消のための手入れ、格好の
セールスポイントである池と湿地の現状維持と安定した水源の確保（特に林が減少したささ池周
辺）。

つつじ池にせっきやく出現した湿地状部の有効利用等々なすべきことは幾らでもある。コイは親
水設備池に集約すると良い。

「動植物の採取は出来ません」と園内教育施設のパンフレットに記すがごとき、確たる論拠に
因らない感性的・感情的な思考は、今や生物多様性条約や生物多様性戦略で求められている種
の多様性の把握の基本となる学術的分布調査に必須の採集記録とその保存を阻害するものでは
あることを行政や自然愛好者集団は認識することが肝要である。公園整備の進行に伴い、この問題は益々
大になるであろう。

6. 謝辞

現地に行きされご意見を賜り、植物の同定も煩わした浜島繁隆氏、園内への入場と調査に便宜

を図ってくださった(財)愛知県都市整備協会・地球博記念公園管理事務所長小林哲可氏に深謝する次第である。

9. 参考文献

- 1) 小林元 (2002) : 長久手町の地名総集編、B 5、230PP. 長久手町
- 2) 小林元 (2008) : 万博会場の溜め池の変遷、郷土文化、59-65, 名古屋郷土文化会
- 3) 高崎保郎 (2000) : 愛知県瀬戸市及び長久手町万博予定地のトンボ相 (第2報)、佳香蝶、52 (201)、1-10
- 4) 長久手町役場 (2003) : 長久手町史本文編、B 5、768pp、長久手町